

日本初の量産パイプを 生んだ工場



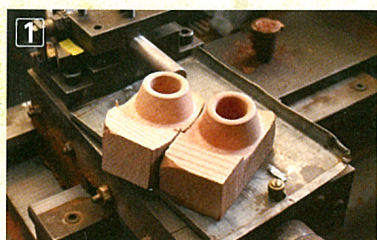
深代喫煙具製作所

Roland「AKAGI」

群馬県に伝わる上毛かるたで「裾野は長し赤城山」と詠われる上毛三山(赤城・妙義・榛名)の中から命名しました。

問い合わせは下記フカシロ連絡先まで

マシンメイドパイプの工程



木取りした原木を旋盤に取り付け、「道具」となる火皿と、ボウルトップの荒削りを行う。



型ならい機で、ボウル部分とステムへの形状に整え、吸口を差し込むダボ穴を開け、煙道を貫通させる。



吸口装着。この後、サンドペーパーで手仕上げを施し、ランクごとの修正と着色、バフ仕上げ(ツヤ出し磨き)を経て完成する。

榛名、浅間、妙義、谷川、そして赤城——。フカシロのパイプブランド『ローランド』は、モデル名に群馬県に聳える山々の名を借りている。『ローランド』をはじめフカシロの国産パイプを一手に製造するのは、群馬県みなかみ町の「深代喫煙具製作所」(フカシロとは別系統の会社)。群馬の山の名をパイプに冠したのは、長くパイプを作り続けているこの地への感謝の表れだ。深代喫煙具製作所の創業者は、フカシロ初代社長・深代守三郎の親戚にあたる深代三之助。彼が東京で工房を興した1930年当時は「パイプ」と言えば両切りたばこのホルダーを指した時代。ホルダーのメーカーとしての創業だった。1934年、大蔵省専売局から日本初のパイプたばこ『桃山』が発売されると聞いた三之助。だがマドロスパイプは高価で希少な輸入品に限られた。パイプ文化を根付かせるには入手しやすく価格も手頃なパイプが不可欠。三之助達は日本初の量産パイプの製造を決意する。



『桃山』の新聞広告にも三之助達が手掛けたパイプが。このパイプが著名人200人に贈られ、国産パイプの存在を世に知らせた。



左3代目社長の淳郎氏、右2代目社長の勉氏

が三之助達だ。「最初には舶来のパイプを目に焼き付けよう」と日本橋丸善に通ったそうです」と2代目社長の勉氏。量産パイプの製作に懸けた三之助達の血のじむ努力が日本のパイプ文化を花開かせた。

「マシンメイド」というから、機械からポンプ出てくるものだと思っただけでしょう。三之助の孫で3代目社長の淳郎氏が笑う。量産品のマシンメイドとハンドメイドの大きな違いは、輸入するブライヤー原木の形状と「道具」となる火皿をあける手順。マシンメイド用は「エボシシヨン材」といい、形が規格寸法に裁断された素材。かたやハンドメイドでは瘤のついた大きな「プラトリー材」を用いるため、歪みやシェイプの自由度が高いのだが、その話は次号に。ともに原木から形を削り出す旋盤や、煙道を開けるドリルは機械だが、操るのは人間。淳郎氏を含めた8人の職人の熟練した腕で生み出す。この一貫生産をゼロから築き上げたのが三之助達だ。